松本 悟 先生を偲んで

松本先生の思い出

澤田 勝寛　公益財団法人 日本二分脊椎・水頭症研究振興財団 理事長
医療法人慈恵会新須磨病院 理事長・院長

平成29年11月7日、当財団の創設者で初代会長である松本悟先生が亡くなられました。享年90歳でした。先生は若くして脳神経外科医の道を志され、日本の脳神経外科の礎を築いてこられました。また初代神戸大学医学部脳神経外科教授として、診療はもちろん教育者として多くの優れた脳外科医を育てられました。

神戸大学を退官されてからは、当財団の設立にご尽力され、初代会長としてライフワークである二分脊椎と水頭症の研究と啓蒙活動に精力的に取り組まれました。

私は、神戸大学医学部の学生時代から先生の指導を受け、その後、新須磨病院や財団でも公私にわたりお世話になりました。私の人生のメンターである松本先生を偲び、思い出をまとめました。

◆ポリクリでの思い出

私が松本先生に初めて「遭遇」したのは、かれこれ40年ほど前、昭和51年頃のポリクリ（臨床実習）のときでした。今までお目にかかったこともない先生で、怖い厳しいとの評判の教授との出会いは、私にとってはまさしく「未知との遭遇」でした。

私の学籍番号は11082　イニシャルがSのグループで、後に東北大学の教授になったS君以外は、どんぐり揃いのグループでした。財団の現会長の長嶋先生と違って不出来であった私は、とにかく松本先生とはできるだけ視線を合わさないように、伏し目がちにして気配を消していました。当時の松本先生は50歳の気鋭の脳外科医。大きな眼から発せられる皮膚につき刺さるような鋭い眼光、そして特徴のある大きな頭。その先生にギョロリと目を向けられると、たまったものではありません。私の盾になってくれた気の毒な友人がいました。松本先生の質問に答えられず、その態度が悪かったため「貴様！！」と胸ぐらをつかまれて震え上がっていました。その友を横目で見て「気の毒に！」と同情しながら「助かった！」と安堵の胸をなでおろしたのも、懐かしい思い出です。

◆症例検討会の思い出

ポリクリ学生は脳外科の症例検討会にも出席します。ある夏の日です。検討会が始まって間もなくツッカケを履いてペタペタと足音をたてながら入ってきた若い先生がいました。アイスキャンデーをかじりながら、松本教授の後ろの椅子に座ると、なんと松本先生の椅子の背もたれに足をかけたのでした。症例検討に聞き入っておられる松本先生はさして気にされるわけでもなく、そのまま議論は進みました。発表者が「それではこれで、、、」と終わりかけると、そのアイスキャンデー先生は「ちょっと待った！」と、手術適応や術式に反対意見を述べられ、そこからまた議論が再燃しました。色々な意見が出尽くしたあとで、最後に松本先生が、理路整然とご自分の意見を述べられそれで方針が決定されました。

今の時代ならいざ知らず、40年前といえばまだまだ白い巨塔の時代。封建的な医局運営が当たり前の頃です。それが、脳外科医局に限っては、猛者ぞろいで自由闊達な雰囲気があり、ポリクリに怯えていた私たち学生も、脳外科に魅力を感じたものでした。

◆日本二分脊椎水頭症財団での思い出

私は医学部卒業後は外科医を志したので、脳外科の松本先生と接する機会はほとんどありませんでした。久しぶりにお会いしたのは財団の設立後です。この財団は、松本先生と私の父である前理事長の澤田善郎が一緒になって設立した財団です。10年ぶりくらいにお目にかかったわけですが、相変わらず眼光鋭く、いつも奥歯を噛みしめたような厳しい表情をされていました。私はもう学生ではないので、そんなにかしこまって緊張する必要はないわけですが、昔の癖はそう簡単には直りません。思わず背筋を伸ばし「気をつけ」をしてしまいます。それでも財団の事務局に何度かおじゃまするう

新病院上棟式　平成27年（2015年）4月
左列中　松本先生　左列右　澤田理事長

平成27年（2015年）　米寿のお祝い

ちに、頬のこわばりが緩み普通に話ができるようになりました。

脳外科の門外漢である私が、松本先生のすごさを知ったのが、財団設立を記念して開催された国際シンポジウムでした。ポートアイランドにある国際会議場で財団主催で開催したシンポジウムに、国内外から脳外科医の重鎮が多数出席されました。私は出席者の肩書しか分からなかったのですが、知り合いの脳外科の先生が、「これほどの高名な脳外科医が集まるのは、日本脳神経外科学会でも難しいのではないか」と言われているのを聞いて、松本先生の脳外科医としてのお立場を初めて知ったわけです。

◆寄付集めの思い出

財団は基本財産３億円で設立しその利息で運営する予定でした。しかし。バブル崩壊後、ご承知のとおり金利は一気に下がってしまい、当初の目論見は大きく外れることとなりました。財団の運営のために寄付集めをしなくてはなりません。まずは身近なところに声をかけて寄付の依頼をすることから始めました。私も微力ながらお手伝いをしました。大手企業に依頼にいくと、いかにも総会屋対応の手練といった感じの海千山千の総務部長が対応してくれました。当時の私などはまだ若輩者。「若造が、、、」と軽くあしらわれることもありました。しかし、松本先生は格が違います。最初は「武家の商法」とすこし侮っていたのは確かですが、あの鋭い眼光、ニコリともしない表情、一言一言を噛みしめるような語り口で話をされると、椅子にふんどりかえっていた担当者も背筋を伸ばして応対するようなります。相手も真剣にならざるを得なくなります。松本先生が直接寄付の依頼に行かれると、社長にまで話がすぐ上がり、寄付も集まりやすくなりました。定期的に上京され、企業まわりをされていたのを思い出します。

◆日常診療の思い出

財団での会長業務のかたわら80歳半ばまで、週一回の診察、脳ドック、病院関連施設の神戸総合医療専門学校で講義をしていただきました。その姿に接して学んだことは、きちっとした身だしなみ、上品な言葉遣い、丁寧な対応、妥協のない診療ということです。

松本先生がラフな格好をされているのを見たことはありません。いつもプレスのきいたワイシャツにブルー系の上品なネクタイをされ、白衣のボタンはきちっと留められていました。一番驚いたのは平成７年１月の阪神淡路大震災のときです。地震後間もなく病院に来てくださいました。その時も、きちっとネクタイをされ白衣を着ておられました。大きな被害を受けた病院で、慌ただしくバタバタとしている私に「どうですか。患者さんはいかがですか。お手伝いできることは何でもおっしゃってください」と言われたときほど、松本先生のお姿が神々しく見えたことはありません。勇気づけられました。海軍兵学校で鍛えられた「乱にして動じず」のお姿を垣間見た思いでした。

誰に対しても言葉遣いが丁寧で、タメロはもちろん、ぞんざいな物言いとか、なれなれしい話し方をされたのを聞いたことはありません。いつも正しい敬語や丁寧語を使われていました。患者さん一人ひとりに、詳細な問診と念の入った理学所見を基本に診察をされていたのが印象的です。待ち時間が長くなっても、診察を受けた患者さんは得心し診察室をあとにされていました。

脳ドックでも同じです。一度でも松本先生の診察を受けられた方は必ずリピーターになられました。MRIなどの画像に少しでも疑問があると、とにかく納得のいくまで撮りなおしを技師に依頼されていました。読影もそうです。何度も何度もフィルムを見直しては、所見の訂正をされていました。スタッフの手間が増え、患者さんにも迷惑がかかるので、正直そこまで徹底しなくてもいいのではとの意見もありましたが、そのうちに松本先生の診療に対する真摯な姿勢が市民権を得て、「右に倣え！」とする医師や職員が増えてきました。

◆思い出アラカルト

財団の事務所が病院に移転してからは、松本先生と接する機会が増えました。いつ立ち寄っても、いつも勉強か読書をされていました。専門外ならわかりますが、脳外科の勉強です。あれだけ偉い先生でしかも80歳を過ぎてどうしてそこまでされるのかと思いましたが、それが松本先生のすごいところです。いつまでも「脳外科道」を追求されたのだと思います。

わりと偏食があったようです。ナマモノはほとんど召し上がらず、刺し身はだめ、肉も焦げるくらいのウエルダン。うどんはコシの強い太めがお好みでした。いっとき私はうどん打ちにハマっていました。細く打てずやむなく太くなったうどんを、時々財団に持っていきました。私の作った出来損ないの太いうどんを、九十九さんが財団のミニキッチンで茹で、先生が美味しいといって喜んで食べておられた情景を思い出します。

車の運転は慎重でした。ある朝、私の車に前にトロトロとゆっくり走っている車がいました。運転すると人が変わるといわれる私がクラクションを鳴らそうとして、よく見ると松本先生が運転されているのが分かり、従者のように先生の車の後について、病院にたどり着きました。

◆お別れのとき

お亡くなりになる２年ほど前まで財団の会長業務をされていました。神戸大学医学部脳神経外科教授として診療・教育・研究に多大な貢献をされ、教授退官後は財団で、二分背椎・水頭症の研究と啓蒙活動に全精力を注がれてきました。まさしく生涯現役を貫かれたと思います。現役を退かれてから、体調を崩され何度か入院されましたが、そのたびに不死鳥のごとく回復してこられました。

そして平成29年11月７日午後10時46分、新須磨病院の脳外科病棟の一室で、奥様、お子様、お孫様など大勢のご家族に見守られながら90年の生涯を閉じられました。財団会長の長嶋先生、事務局長の九十九さん、教え子である当院副院長の近藤先生、脳外科部長高石先生がずっと傍についておられました。私も最期に立ち会わせていただくことができ、本当に光栄なことだと思っています。

私にとっては偉大なメンターでした。威厳のある立ち振舞い、ひとつひとつに重みのある言葉、決して安易な妥協を許されない医療、流行に迎合しない態度、敬虔な宗教心。なかなかどれも真似ることができないものばかりです。

論語に「剛毅朴訥は仁に近し」という言葉があります。この朴訥を寡黙に置き換えたものが、松本先生が一生涯貫かれた「生きる姿勢」であったように思います。

優れた医学者、偉大な人生の師との別れは辛く悲しいものですが、先生の教えを忘れずに、これからの医療に取り組んでいくことをお誓いして、追悼の言葉とさせていただきます。